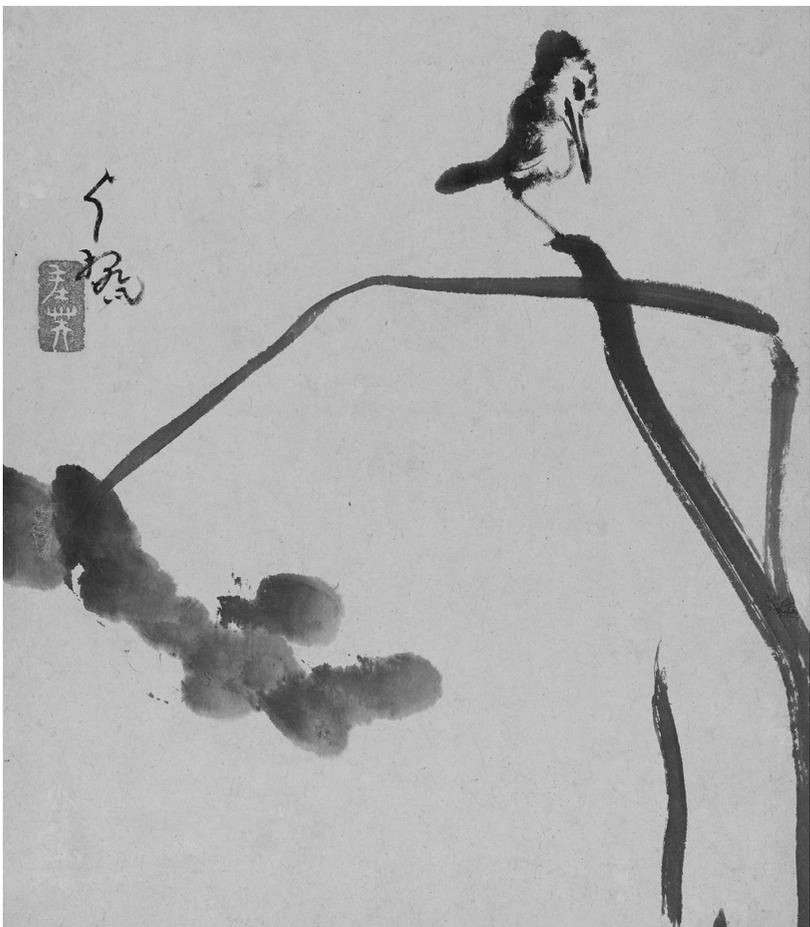


日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇二三年（令和四年）十二月一日
第二號（通卷第四二號）



八山人「安晚帖」蓮蕪翠圖（泉屋博古館蔵）

◆目録

- 二 卷頭言
 - 二 第74回大会を終えて
 - 大木 康
 - 四 舞台裏としての合気道
 - 池平 紀子
 - 六 岩手大学平泉文化研究センターにおける中国研究
 - 藪 敏裕
 - 八 「書評シンポジウム」観察記
 - 齋藤 智寛
 - 十二 二〇二二年度日本中国学会賞について
 - 十三 各種委員会報告
 - 大会委員会／論文審査委員会／出版委員会／選挙管理委員会／将来計画特別委員会／研究推進・国際交流委員会
 - 十六 二〇二二年度 会員動向／新入会員一覧
 - 十七 二〇二三～二四年度役員一覧
 - 十八 日本中国学会二〇二二年度（令和三年度）収支決算書
 - 十九 日本中国学会二〇二二年度（令和四年度）予算書
 - 二〇 事務局からのお知らせ／「国内学会消息」についてのお知らせ
 - 二三 「会員論著目録（二〇二三年）」作成への協力のお願い
 - 二四 「日本中國學會報」論文執筆要領

編集●京都大学文学研究科 宇佐美文理
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
メールアドレス：gakkaidayonkyoio@gmail.com
発行●日本中國學會
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

第74回大会を終えて

理事長
大木 康

10月8日(土)、9日(日)の両日、日本中国学会第74回大会が、早稲田大学において、待ちに待った会場開催の形で開催されました。今回の大会は、会場開催ばかりでなく、会場と参加者をオンラインでつなぐハイ

ブリッドの形で行われました。その結果、会場にはおよそ220名、オンラインで200名の方が参加され、盛況裡に大会を開催することができました。大会をご準備くださいました開催校代表の渡邊義浩先生をはじめ早稲田大学のみなさまに、心より御礼申し上げます。

新型コロナウイルス蔓延のため、さまざまな活動に制約が加えられておりましたが、ようやく学会大会の会場開催ができるようになったかと感慨無量でありました。コロナによって、昨年、一昨年と本学会の大会もオンライン開催を余儀なくされました。しかし、大会の開催は継続することが重要で、一度途切れてしまうと、再開するのは容易なことではないでしょう。この困難な時期に、オンラインという新しい方法によって大会開催を続けていただいた慶應義塾大学、愛知大学のご努力を多とし、改めて御礼申し上げたいと思います。

会場とオンラインのハイブリッド開催は、本学会大会でも

はじめての試みでした。国内国外を問わず、会場に赴かなくても大会に参加できることは、大きなメリットです。その一方で、両様の準備を求められる開催校にとっては、二倍あるいはそれ以上の負担になったことと思います。すべての開催校にハイブリッド開催をお願いすることは不可能ではありませんが、今回、大会のあり方として一つの可能性をお示しいただいたことはまちがいありません。昨年、一昨年に続き、大会アンケートを行っておりますので、会員のみなさまから貴重なご意見を頂戴できれば幸いです。

歴史部会の開設

今回の大会では、従来の哲学・思想部会(8件の研究発表)、語学・文学部会(10件の研究発表)、日本漢学部会(5件の研究発表)に加えて、歴史部会が開設され、8件の研究発表が行われました。これまでも次世代シンポジウムなどの場で歴史の部会が設けられたことはあったものの、大会で歴史部会が設けられたのは、はじめてのことです。日本中国学会は、これまで中国哲学、中国語学・文学を中心として学会活動を行ってまいりました。しかし、そもそも会則第2条(目的)には「本会は中国に関する学術の研究と普及および会員相互の親睦を図ることを目的とする」とうたわれています。中国に関するすべては無理としても、少なくとも近接領域である歴史を加えることは、ある意味本会の悲願であったと思います。哲学・思想研究、あるいは語学・文学研究を歴史の知識なしで行うことは不可能です。本会のカバーする領域として歴史が加わることは、従来の研究にとっても、裨益するところ大であると信じます。本大会に合わせて開催された理事会において、学会報の「論文執筆要領」が改訂され、審査の領域に歴史が加えられることになり、論文審査の体制にも反映される予定です。会員諸氏の身近におられる歴史研究者の方にも、どうか本会への入会をお勧めください。

書評シンポジウム

今回の大会では部会別の研究発表、次世代シンポジウムに加えて、新たな試みとして書評シンポジウムが行われました。書評シンポジウムについては、主宰された研究推進・国際交流委員会(三浦秀一委員長)から、より詳しく紹介いただくことになっておりますが、この書評シンポジウムは、そも

そも本会の若い会員にとって、会の活動をいかに魅力的なものにするかという課題を踏まえて企画いただいたもので、若い会員のデビュー作にあたる単著を、パネルディスカッションの形で論じようというものです。書評シンポジウムは通常の研究発表と異なり、はじめから一冊の書物を対象とする点で、議論的がしばられているため、どの会場でもなかなか突っ込んだ議論が行われておりました。会場を見渡すと、当該の書物を携えて会場に臨んでいる参加者も多く目につきました。

現在博士論文を執筆中の大学院生のみなさん、そして間もなく著書をまとめようとしている若手の会員にとって、よし、次は自分の本も、という大きな励みになったのではないかと思います。こうした試み、これからも続けて行ければと考えています。

若手会員の研究発表に対する宿泊費補助

昨年度、本会顧問の加地伸行先生より、多額の寄付金を頂戴いたしました。本号「事務局からのお知らせ」にありますように、この寄付金を有効に使わせていただくために、本会の会計に「特別寄付金会計」の項目を新設し、学会賞賞金の増額、および大会で発表を行う若手会員の宿泊費補助を行うことといたしました。今回の大会では、東京での宿泊を必要とした10名の会員に、それぞれ1万円の宿泊費補助金を支給することができました。この場を借りて、改めて加地先生に御礼を申し上げるとともに、若手会員のみなさんの大会での研究発表を奨励したいと思います。

『學會報』第74集及び会員名簿の刊行

本大会に合わせて、『日本中国學會報』第74集及び会員名簿が刊行され、会員のもとに発送されました。投稿論文の審査にあられた論文審査委員会（渡邊義浩委員長）、そして刊行実務にあられた出版委員会（静永健委員長）、編集担当校（明治大学 甲斐雄一教授）のご苦勞に対し御礼申し上げます。本第74集から、中文目録も加えられました。

ここしばらく、学会報が以前と比べて薄くなっていることをお感じの会員のみなさまも少なくないのではないかと思います。本学会報は、もともと投稿論文16篇、評議員依頼論文2篇、一般会員依頼論文2篇の20篇の掲載が通例ですが、

今回は投稿論文が12篇に止まっております。これはもちろん投稿論文の厳正なる審査が行われている結果ではあるのですが、残念ながら不採択になっている論文も少なくないことはたしかです。会員諸氏におかれましては、積極的な投稿をお願いできればと思います。学会報は、若手の発表場所と決まったものではありません。中堅あるいはベテランの先生方の投稿も歓迎いたします。

なお、本会ホームページから、過去の学会報掲載論文をpdfによって読むことができます。今年、広報委員会（木津祐子委員長）のご努力により、これまでは日本語のページからpdfに飛べるだけであったものを、新たに英語及び中国語のページからも論文にたどりつくことができるようになりました。学会報掲載論文が、世界中により多くの読者を持つことが期待できるのではないのでしょうか。

会員論著目録の試行

学会報の第71集所載分から、「学界展望」のスタイルが、講評プラス論著目録の形から、講評形式に変わりました。そのため、時代別、ジャンル別に一覧可能な論文目録がなくなりました。CiNii その他の論文データベースも、キーワードによる検索は可能ですが、テーマによる一覧は不可能です。そうした不便を少しでも解消せんがため、将来計画特別委員会（弐和順委員長）からのご提案により、本学会ホームページ上に「会員論著目録」データベースを作ることと考えており、まずは2022年の会員各位の論著につき、試行版を作ってみたいと思います。「便り」本号に詳細を記しておりますので、ご協力をお願いいたします。なお、これは会員の論著を、ご自分で簡単な入力によってご登録いただくもので、会員の権利として入力していただければと思います。そして来年

以上、今年、早稲田大学での大会と本会の関連事業について、かいつまんで報告させていただきました。日本中国学会の活動は、会員のみなさまのご協力なしには成り立ちません。どうぞともに日本中国学会を盛り立てていただければと存じます。

来年は、大阪大学（開催校代表：浅見洋二教授）で大会が開催されます。大阪において、会員が一堂に会せることを祈りつつ、ここに筆を擱かせていただきます。

舞台裏としての合気道

池平 紀子
大阪公立大学

『街場の中国論』はなかなか面白い」と三浦國雄先生が仰ったのをきっかけに内田樹氏の著書を読み始め、縁あって合気道師範でもある氏が神戸に開かれた道場「凱風館」で合気道を習い始めて八年に

なる。合気道は基本的に徒手でやるが、手刀を立て、剣術の理合いに則って体術を行う。それで、三つ子の魂というべきか、思いがけず子供の頃に習っていた剣道の身体感覚を思い出すことになった。試合がなく、時おり昇級・昇段審査や演武会があるくらいで、決まった型の稽古が中心だというのも、続けられている理由かも知れない。

「相手と拍子を合わせてはいけない」と内田先生は仰る。「合わせようと思った時点で、すでに後手に回っているということだから」と。また「相手を凝視してはいけない」とも仰る。「場全体をぼんやりと見て、相手にもポトンと目を落とし、自分の身体が一番安定した状態で、動きたいタイミングで動きたいように動い」たなら「自然と相手はその動きに巻き込まれる」はずで、それが「場を主宰すること」なのだと。「合気」とは相手を見据えて

相手の気に合わせて動くことだと思っていた私のイメージは悉く覆されたが、相手に居着くと自分自身が見えなくなると繰り返し戒められるところが、禅の「主人公（自己本来の面目）」の考えにも似ていて面白いと感じている（鈴木大拙は合気道を「動く禅」と呼んだ）。「稽古はあくまで舞台裏であり、学んだことは表舞台である日常生活で活かすもの」との内田先生の言葉に従い、体得にはほど遠いものの、日頃からこれらの言葉を心に留めて生活している。

生活といえば、この八年は様々な変化が身に起きた八年だった。まず、長い非常勤講師生活からようやく任期付き教員として前任校に採用され、四年間勤めた。この間、父が亡くなり母は介護が必要となった。その後、2020年4月に中国語及び中国思想の教員として大阪府立大学に着任した。ところが、一度も教壇に立たないままに、新型コロナウイルス感染症の流行でオンライン授業が開始し、同時に、2022年4月の大阪公立大学開学に向けた準備も始まった。秋からは大学院のゼミと院生指導もスタートした。

開学準備で私が主に携わったのは初修外国語の中国語で、統合する大阪市立大学と共に、新カリキュラムに沿った様々な詳細事項を決めていく必要があった。異なる大学を統合するというのはまさに大手術で、しかも学内のみにとどまらず、カリキュラム変更は複数大学に出講する非常勤の先生方のスケジュールにも影響するため、すでにコロナの非常時で大変なところに、多くの先生方、少なからぬ近畿圏の大学に迷惑をかけてしまった。今年4月、ついに新大学が開校したが、基幹教育は2025年に現在建設中の森ノ宮キャンパスに移転する予定なので、その準備も始まっている。

生活の変化に伴う大小のストレスは無論あったが、合気道の稽古に通い、心身を整えておくことが防御壁となった。それでも、コロナに起因する変化はあまりに大きく、稽古も長く休みになっていたこともあり、一年以上も両腕が上がらなくなってしまった。

環境は時々刻々と変わり続けるし、時にはあっという間に一変するのだということを、我々はコロナによって

否応なく知ってしまった。私もそのひとりであるが、それを思い知らされた瞬間がある。2019年9月に安徽省亳州市渦陽県で「老子道文化學術検討会」という国際学会に参加した際、せっかく中国に来たのだからと、南陽に故郷のある友人が、武漢と荊州を案内してくれた。道観や寺院、湖北省博物館などを参観したが、期せずして三国志ゆかりの地を巡ることにもなり、心に残る楽しい旅となった。しかし、そのわずか四ヶ月後に武漢はロックダウンされ、ホテルの窓から見下ろしていた、多くの人々が行き交い、活気に満ち溢れていた万達広場前交差点が、完全な無人となっている様子をネットニュースが映し出した時、世界というものはこんなにも短期間に、こんなにも大きく変わりうるのだということを知り、強いショックを受けた（これを書いている2022年10月現在、武漢は再びロックダウンされている）。そして、三年経った今でも、まだ世界中でコロナが終息していないことに、私はやはり驚き続けている。

しかし、驚きは驚きとして、それに居着かず、望まない変化であったとしても、それを奇貨として、できることやしなくなったことを始めたならば、そこからなにがしかのクリエイティブなものもまた生まれてくるはずである。なにしろ、両腕が上がらなくなったくらいなので、私自身ができているとはとても言い難いのだが、周囲を見渡せば、本学会をはじめ様々な学会の大会が、臨機応変にオンラインや対面との併用で開催され、場合によっては例年よりも多くの参加者を集めているし、また、発表や質疑応答の方法も、様々なツールが利用され、試行錯誤を経て洗練されてきている。方法によっては、短時間でも深い議論が可能だということを知ることができたし、柔軟でフットワークの軽いスタッフに牽引され、学会がある種の活況を呈しているように感じている。

先日開催された本学会第74回大会では、書評シンポジウムや歴史部会の創設など新たな試みがなされており、私もオンラインであちこちの部会をサーフしながら、普段はあまり聞く機会のない文学や歴史学の話に興味深く拝聴した。開催形式はとにかく、新企画についてはコロナ禍とは直接関わらないかも知れない。しかし、そこに

は変化の気運に乗って立ち上げられたような、クリエイティブな躍動や勢いが感じられた。

もっと小さい規模の、日々の教育や研究の場でも、同様のことは至るところで起こっているに違いない。私は、図書館も研究室も閉まっているが、オンラインで大学院のゼミや院生指導をしなければならない、という状況になってから、それまでよりも積極的に国内外の図書館や研究機関が公開する漢籍のデジタルアーカイブスを利用するようになったし、また、長年続いてきたものの、主宰の三浦先生はじめメンバーが成都・大邱・東京・千葉・北海道と世界各地に散らばっていたために休会状態が多くなっていた『明儒学案』と『雲笈七籤』の研究会を、世話役としてZoomで定期開催するようになった。どちらもコロナ以前から技術的には可能であったのだが、習慣が邪魔をして行動に移せなかったのだ。問題が起きてから対処するのではなくすでに後手に回っているのだが、それでもここから新たな工夫や創造をしていければと思っている。

朝稽古は六時半から始まる。道着を着て袴を穿き、下丹田の辺りで袴の紐をキュッと締める。体操と呼吸法を行い、体術の稽古が始まる。稽古中もマスクは着けたままであるが、声を出さないのもそれほど苦しくはない。途中で出勤時間や登校時間が来た人は、そっと一礼をして道場を後にし、最後まで残って稽古をした人は、さっと掃除をし、少し先生や道友たちと喋ってから、生活の場に戻っていく。それぞれの生活の場には、様々な変化があるに違いない。しかし、恐れずになすべきことをなそうとするに違いない。そして、自分もそうありたいと思う。自身にとって特に変化の大きかったこの時期に、このような舞台裏を持たたことは、私にとっての僥倖である。

岩手大学 平泉文化研究センター における中国研究

藪 敏裕
岩手大学

担当者からの依頼により、今回は私の所属する岩手大学の平泉文化研究センターを中心とする中国研究について紹介したいと思います。

一、平泉文化研究センター

平泉文化研究センター（以下「センター」）発足のきっかけは、平成17～21年度文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」（以下「にんぶろ」）です。この科研において、岩手大学を中心とした「東アジアにおける死と生の景観」班（以下「景観班」）は、東アジアとりわけ華中沿岸域と日本における「死」や「葬送」にまつわる習俗・慣習を調査し、それら習俗の歴史的変遷や影響関係を検討するとともに、その習俗を背後で支えてきた思想や宗教の諸相を比較・考察しました。また、にんぶろは平泉と鎌倉の世界遺産登録を支援することとしていたので、景観班として平泉を東アジアの中で位置づけることをも研究対象としておりました。この過程で中国の陶磁器文化論で著名な林士民元寧波市文物考古研究所所長が、平泉を「海のシルクロード」の

東端として位置づけ、当時の平泉が海域交流を通じて世界につながるネットワークを有していたことに同意をいただきました。平泉の庭園や遺跡群は、その後の鎌倉・京都を中心とする文化的政治的中心から隔絶・忘却された結果、12世紀の状態が残り、世界史的に見ても当時の仏国土（浄土）の理想郷を今日に伝える数少ない事例と評価されています。そのため、平泉を調査研究することは、ほぼ未発掘のままの中国の漢代から唐代の庭園の実態解明、また変容してしまった京都等の平安期の庭園の実態解明など、東アジアにおける理想郷の空間構成を学術的に解明する上で独創的な観点を提供しうる素材でもありました。にんぶろの研究成果は多岐にわたりますが、景観班としては、平泉を東アジアの視点から論じた『平泉文化の国際性と地域性』（平成25年、汲古書院）を刊行しています。平成23年には平泉の世界遺産登録に合わせて、岩手大学はセンターを設立しました。1980年代後半の柳之御所遺跡の発掘以降、この考古学的な発見を契機として、中国との直接・間接の交流の当事者としての新たな平泉像が浮かび上がり、東アジアにおける地域交流史の視座から、具体的資料によるアプローチが可能となっていました。当センターは、平泉を国家の中の一地域としてではなく、国家の枠を越えた各地域の結びつきとしてグローバルな観点から焦点化することにより、日本の一地域史の枠を超えた「世界史的な意義及び価値」を見出した、このような問題意識のもと考古学・文献学的な手法に自然科学的な手法を取り入れた学際的な協働による新しい平泉像を確立することを目指しています。

二、平泉出土中国産陶磁器の産地推定研究

平泉は、物質文化特に陶磁器の流通と消費という観点から見ても、当時の拠点の一つでした。中国をはじめとする遠方からの陶磁器が、平泉において多数出土していることがこれを如実に物語っています。12世紀は、平安京さらには大陸への交流の玄関口であった九州の博多遺跡群をはじめ、日本各地において中国産の陶磁器が流通・消費された時代でしたが、平泉も中国産陶磁器の出土量が比較的多い場所です。この時代は「白磁の時代」とも称され、消費される貿易陶磁としては白磁の流通が圧倒的でしたが、平

泉では壺・水注類に対する需要の高さが特色です。

十二世紀の平泉について、その東アジアにおける貿易陶磁器の流通と消費についての特徴を明らかにするために、当センターでは国際的な共同研究を実施するとともに、文系・理系の枠組みを超えた学際的な研究手法を導入しつつ、国内外の研究者にも参画いただき研究を推進しています。中国側に関しては平泉に流通する中国陶磁器の産地の可能性が高い福建省・浙江省の研究者と協力し、平泉で出土する陶磁器の産地と推定される窯跡の調査やその消費地の調査を行うため、福建博物院考古研究所と浙江省文物考古研究所などと共同研究を行っています。中国研究機関の研究者による平泉出土中国産陶磁器の実見及び当センターの研究者による中国現地の窯跡の実地調査と窯跡出土陶片の調査を行い、当センターが所持するポータブル蛍光X線分析装置を持ち込み、平泉出土中国産陶磁器に類似する（産地と推定される窯跡の）陶磁器片を計測しその成分を明らかにしたうえで、岩手県教育委員会及び平泉町教育委員会が所蔵する平泉遺跡群出土のものに対しても同様に計測を行い、それらの比較・検討を行っています。さらに、博多遺跡群で出土した中国産陶磁器との比較研究や、中国の生産地に近い地域の窯跡の様相及び生産地周辺の海外交易に係る拠点の様相、生産地から離れた中国国内の諸地域における流通消費のあり方などについても検討を進め『貿易陶磁器と東アジアの物流—平泉・博多・中国』（2019、高志書院）を刊行しました。

以上の成果をもとにして、平泉出土中国産陶磁器の生産地と流通に着目し、東アジア地域における陶磁器の流通ルートとシステムのあり方およびそれらが流通した社会的意義を解明する研究を進めていきたいと思っています。

三、日本に所蔵される中国古印に関する調査研究

古印とは、公私のしるしとして文字やシンボルを彫刻（鋳造）した古代の印章です。平泉では柳之御所遺跡出土の「磐前村印」及び宋版一切経に押捺された「明州城下吉祥院大蔵経」などの印影がよく知られています。ところで、岩手県立博物館に収蔵される「太田孝太郎コレクシヨ

ン」は、先秦期から明清期にかけての印章1091点及び印譜『夢庵藏印』・『楓園集古印譜』（正統）等を含む関連資料群で、これらの古印は、日本における中国古印五大コレクションの一つとして数えられています。2016年より、当センター教員を中心にこれらの古印について検討を行い、2019年3月から6月まで岩手県立博物館で行った企画展「風雅好古—太田夢庵の金石收藏・研究と文人の世界」及びその際に刊行した図録『風雅好古』（東京藤樹社）でその成果を公にしました。さらに、これにあわせて2019年4月21日～22日岩手大学と復旦大学の主催により岩手大学で「中国古印研究国際シンポジウム2019 in 岩手」を開催しました。その後これらの古印の図録として『日本岩手県立博物館蔵太田夢庵旧蔵古代璽印』（2020、上海書画出版社）を刊行しています。

この図録に収録される印章のH1（岩手県立博物館の登録番号・図1aとb）を紹介したいと思います。この印影（図2）の左側の字は、隸定では「恚」となります。この字について、復旦大学の劉釗先生は「土」が一個省略されたもので「恚」と読むべきとされていますが根拠がはっきりしませんでした。ところが、最近出版された『清華大学蔵戦国竹簡 11』五紀篇の第25号簡と第76号簡に（ともに「恚」）が見えます。清華簡の整理者によれば、第25号簡と第76号簡は二十八宿に言及した簡所でありこの「恚」字は二十八宿の「恚」宿を指すとされています。さらに最近の研究で五紀篇には斉系文字が多く見え斉国祿下の学と関係が深いとされています。これらのことから、戦国期の斉地方には「恚」を「恚」と書く習慣があったこととなります。岩手県博の印章H1に見える「恚」については「恚」であった可能性が高いこととなります。伝世の古印が、近年出土が相次ぐ楚簡によって解明されることに中国文化の奥深さを感じさせられています。



図1a



図1b



図2

「書評シンポジウム」観察記

研究推進・国際交流委員会幹事
齋藤 智寛

2022年10月8日および9日、早稲田大学を会場とする日本中国学会第74回大会において学会企画「書評シンポジウム」が開催された。本シンポジウムは学会初の試みであったが、筆者は研究推進・

国際交流委員会幹事として委員会に毎回同席し、また二日間3パネルのシンポジウムすべてを傍聴した。小稿では、その経験に基づき委員会での議論を振り返り、当日の様子について感想を記したい。

書評シンポジウムの企画が持ち上がったのは、今期(2021～2022年度)委員会第1回の打ち合わせが行われた2021年6月のことであった。手元のメモによれば、主要な目的が若手の研究推進であること、新たな交流を促す場としての意義が期待されること、さらに具体的には中国学における異なる分野・領域が交流する場の形成に資すべきことが、この時すでに確認されている。その後、同年9月までに打ち合わせは4回にわたり開催され、若手の研究を支援し書評文化にも寄与するという趣旨の再確認と、具体的方法の検討とが行われると共に、平行して大会開催校である早稲田大学との相談が進められた。

かくてまとめられた委員会の提案が理事会の承認を得、シンポジウム開催の告知が行われたのが本「学会便り」2021年第2号、パネルの募集要項が掲載されたのが2022年第1号である。この公募に応じたパネルは3組、「第七十四回大会要項」から摘記すれば以下の通りとなる。なお、応募資格を2018年～2020年に刊行されたものに限ったのは公平さのためどこかで線を引かざるを得ないからで、2017年以前にすぐれた刊行物が無いことを意味しないのは、言うまでもない。

パネルI・福谷彬著『南宋道学の展開』(京都大学学術出版会、2019年3月刊行、本文357頁)

10月8日(土)10時～ 大隈小講堂

評者:岩本真理絵(釧路公立大学。明代政治史、嘉靖～万暦年間の皇帝と士大夫の思考から)／早川太基(神戸大学。唐宋詩学を中心とした琴棋書画などの文人文化の研究)／陳佑真(帝京大学。三蘇蜀学の経書解釈を中心とした宋代思想史)

著者:福谷彬(京都大学)

司会:三浦秀一(東北大学)

パネルII・福田素子著『債鬼転生一討債鬼故事に見る中国の親と子一』(知泉書館、2019年10月刊行、本文297頁)

10月8日(土)13時～ 大隈大講堂

評者:宇野瑞木(専修大学。東アジアの説話文学、特に孝子説話とその図像の研究)／千賀由佳(龍谷大学。明清白話小説中の仏教・民間信仰)／吉田勉(北海道教育大学釧路校。中国思想史・経書解釈学史)

著者:福田素子(聖学院大学非常勤講師)

司会:佐野誠子(名古屋大学)

パネルIII・田村容子著『男旦(おんながた)とモダンガール—二〇世紀中国における京劇の現代化—』(中国文庫、2019年3月刊行、本文352頁)

10月9日(日)13時～ 大隈大講堂

評者:菅原慶乃(関西大学。中国語圏映画史)／松浦智子(神奈川大学。中国古典通俗文芸)／宮内肇(立命館大学。中国近代史)

著者：田村容子（北海道大学）

司会：鈴木将久（東京大学）

討論内容については各パネルによるまとめが学会ホームページの「研究集録」に掲載予定であるから、ここでは3パネルの組織とシンポジウム当日の雰囲気について筆者の感じたことを述べる。

今回の3パネルは、対象著作の領域および評者、著者、司会者の男女比において、ほぼ理想的なバランスを実現し得た。また登壇者の所属機関が首都圏と関西に偏るのは致し方ない面があるとして、その中で北海道からの著者1名、評者2名を迎え得たことを特筆したい。

組織に関して筆者の仄聞したところを記せば、著者と評者の関係については3パネルにそれぞれの特徴があり、著者と必ずしも密接な交流を持たない人物にあえて依頼した場合もある一方、同大学同研究科出身の仲間による応

募といった趣のパネルもあったようである。後者の型は本企画の趣旨とはややずれるようだが、それに意味が無いとも筆者には思われない。シンポジウムのような改まった場ではじめて言い得ることが、きっとあるからである。

それぞれの特徴と言えば当日の司会の方針も、司会者が議論の道筋や順序をこまめに交通整理するパネルもあり、逆に出来るだけ著者と評者の自然な対話に任せようとしていたかに見えるパネルもあった。これは客席からの質問の出やすさやその内容の傾向とも関わることだが、どちらが良いのかは一概に決められず悩ましい問題であると思う。

筆者が事前にもっとも懸念していたのはフロアからの質問が出るのか否かであったが、これはほぼ杞憂で、各分野の重鎮が次々に挙手され、明らかに書評対象を事前に読み込まれた質問を繰り出されていた。実は委員会の議論の中で、評者にはベテラン研究者も認める案も出ていたのだが、最終的には著者と同年齢かそれ以下を公募の条件とした



パネルⅢ会場 大隈大講堂



パネルIII 壇上の風景

のは正解だったと言える。同時に、修士課程の院生が質問に立ったパネルもあったことも報告しておきたい。

話が前後するが、肝心の登壇者による議論については、どのパネルも熱の籠もった報告に2時間があったという間であった。こういう場合の常套句ではあるが、実感なのでお許しいただきたい。これは各パネルとも事前にオンラインにて数度の打ち合わせを重ねており、司会者と著者、評者の間で十分に論点の絞り込みがなされていたためと思われる。何人かの評者は報告後の議論でも文字通りの熱弁を振るい、どんな話題にも恐らくは司会者が期待した以上の内容を回答して筆者に強い印象を与えた。

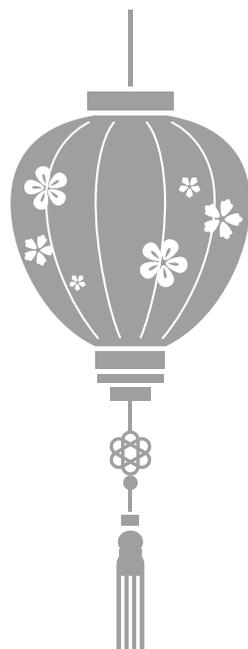
なお、筆者は何かあれば委員会幹事として対応しようと客席のかなり前寄りに陣取ったが、3パネルとも滞りなく進行した。これは登壇者のみならず、早稲田大学の諸氏による周到的準備と運営あってのことであろう。

一つだけ残念だったのは、評者によってはパネルの中で自分に期待されている役割を意識していることか、司会者から向けられた質問に答えるほかは発言の範囲を抑制しているかに見えたことである。あるいは全く別な角度から話してみたいこともあるのではと、客席の筆者は勝手に落ち着かなさを感じていた。また何らかの不足ということではないが、パネルの組織には文・史・哲の交流のほか、古典学と近現代研究の相互乗り入れを意図した人選があって良いのではと思った。これは、委員会の議論でも有り得る選択とされつつ今回は実現しなかった事柄でもある。

筆者の立場で言うのは恩着せがましいことにもなりかねないが、壇上の熱気を身に浴びながら改めて感じたのは、こうした活動の一番の受益者はその登壇者ではないかということである。今回の準備を通して改めて考えが整理されたこともあろうし、学会の「研究集録」とは別に独立

した書評をまとめることも考えられるだろう。同じことは企画者にも言える。二日間、筆者にとって馴染みの議論として参加できたパネルもあり、専門家ならどのような議論をするのか答え合わせのような気持ちで臨んだパネルもあったが、いずれも実に楽しい体験であった。

学术界を活性化させる方策にはすでに有る活動の維持充実と、これまでは無かった活動の創始とがあると思われるが、今大会での書評シンポジウムは後者に当たる。そして次回からは維持充実の段階に入るが、今回の3パネルは図らずもパネルの組織や当日の進行についてそれぞれに異なったモードを示しているから、理念を継承しつつ自由なアイデアも加えたパネルの応募を期待したい。



二〇二二年度日本中国学会賞について

今年度の受賞者は、文学・語学部門より陸穎瑤会員（対象論文は『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』所収「暁賦」佚句考—東アジアに流伝した晚唐律賦—）／『学会報』第73集）に決定し、10月8日（土）早稲田大学大隈大講堂で開催された第74回大会の総会において授与式が行われた。なお、選定理由は『学会報』第74集の彙報29～30頁に掲載。

授与式での陸会員挨拶の概略は以下の通り。

「京都大学文学研究科中国語学中国文学専修博士後期課程の陸穎瑤と申します。この度の受賞、大変光栄に存じます。また今年の大会がハイブリッド方式で開催されたため、会場でご挨拶することが叶い、嬉しく思っております。関係者のみなさまにもお礼申し上げます。

私の受賞論文は、一昨年学会大会で研究発表を行い、去年の『学会報』に掲載されました。口頭発表の準備段階より、木津祐子先生・緑川英樹先生・成田健太郎先生にご指導をいただきました。私が参照していない文献資料をご提示くださり、また拙い日本語の文章を丁寧に添削してくださいました。口頭発表および投稿論文の査読においてもさらに多くの先生方よりご意見を賜りました。ありがとうございました。

京都大学大学院に進学する以前、交換留学で訪れた國學院大學の先生方にもお礼を申し上げます。指導教授の川合康三先生は今に至るまでずっと温かく見守ってください、文学研究の楽しみをたくさんお教えてくださいました。はじめて日本語で口頭発表をした時、資料と読み原稿の制作や、意思をより分かりやすく伝える話し方など、いろいろと手ほどきを受けました。赤井益久先生、石本道明先生も折に触れて研究の進捗を気にかけてくださり、励ましてくださいました。

博士後期課程に進学してから3年間、一般財団法人橋本循記念会より奨学金を頂戴いたしました。お陰様で、比較的余裕のある学生生活を送ることができました。

最後に、母校復旦大学において学部および大学院修士課程の7年間ご指導を仰いだ査屏球先生に感謝します。査先生は唐代文学の研究における、日本の文献を利用する重要性、日本語の研究成果を積極的に取り入れる必要性を常々説かれました。そのお話に啓発されて、私は古代東アジアにおける漢文学、特に唐代文学の流伝について関心を持つようになりました。『千載佳句』『和漢朗詠集』といった平安の佳句集を目にしたのも学部生時代でした。この経験があったからこそ、現在取り組んでいる「平安朝における中晩唐詩賦の舶来と享受」という課題にたどり着くことができました。これまでさまざまにご心配をおかけしましたが、研究の出発点を与えてくださり、また今回の受賞を喜んでくださっている先生に、もう一度感謝の気持ちを伝えたいと思います。

受賞論文は両朗詠集に収録される数種の佳句に焦点を当てて考察しましたが、その背後には、古代東アジアにおける漢文学の流伝・享受・受容という大きな問題があります。これからは『千載佳句』や朝鮮半島の漢詩選集『夾注名賢十抄詩』などをも考察の対象に加え、研究を進めて参りたいと存じます。これからもご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。」



授与式にて、右側が受賞者。

各種委員会報告

【大会委員会】

委員長 小島 毅

(1) 第74回大会について

2022年度第74回大会は早稲田大学において10月8日(土)・9日(日)の両日にわたって開催されました。今回は大隈講堂の2つのホール(大講堂・小講堂)と小野記念講堂を会場とし、YouTubeによる同時配信を行う方式で実施されました。報告者・司会者は会場に集まり、質問者は会場参加の人はその場で発言、オンライン参加者はネット上に書き込んで司会者が紹介するというやり方を採りました。本学会では初めての試みでしたが、開催校による入念な準備と手慣れた運営のおかげで順調に進行しました。あらためて準備会代表の渡邊義浩会員と運営に協力して下さった早稲田大学教員ならびに非会員を含む学生諸氏に感謝申し上げます。

今回の大会では研究発表(哲学・思想部会8名、文学・語学部会10名、日本漢学部会5名、歴史部会12名)と書評シンポジウム3つ、次世代シンポジウム1つが行われました。事前参加登録者が429名、当日の来場者は217名、YouTube再生回数は8日が第一会場564回、第二会場606回、第三会場387回、9日が第一会場173回、第二会場175回、第三会場181回でした。今大会では新規の試みが2つあり、1つは研究推進・国際交流委員会の企画による書評シンポジウムで、詳細は本号に別掲されています。もう1つは開催校の意向で歴史部会を設けたことで、いずれの部会・シンポジウム会場にも多くの参加者が集まり充実した研究発表と質疑が行われました。

また、大会開催にあわせて校内の総合学術情報センターにて「早稲田の東亜貴重資料展」が催されました。康有為が大隈重信の死に際して寄せた一幅の書や清末の中国人留学生たちが書いた「鴻跡帖」などが展示され、特に国宝の卷子本2点(「礼記子本疏義」と「玉篇」)の前では多くの会員が代わるがわるのガラス越しに凝視して鑑賞していました。

2020年に新型コロナウイルス感染症が流行しはじめて以来の会場開催、かつ2019年には台風襲来で開催前夜に中止に追い込まれるというアクシデントを経験しているため、会員どうしが会場で実際に顔を合わせるの4年ぶりとなりました。技術の進歩によりオンラインによる会議やVR(仮想空間)の共有ができるようになりましたが、視覚・聴覚だけにとどまらない「接人」が学会活動で重要であることを再認識できました。

(2) 2023年度第75回大会について

明年度、2023年度日本中国学会第75回大会は、大阪大学(大会準備会代表 浅見洋二会員)において10月7日(土)・8日(日)に開催されます。第74回大会の会員総会及び閉会式では、副理事長でもある浅見会員が「ぜひ脱マスクで開催できるようにしたい」と希望を述べて挨拶していました。

【論文審査委員会】

委員長 渡邊 義浩

今回の学会大会で歴史部会を設置したことを受け、次号75集より歴史部門の論文も投稿を受け付ける運びとなりました。投稿に関する詳細については、この便りの最終ページの論文執筆要領を御覧ください。投稿論文の受付締切は2023年1月15日(消印有効)となります。みなさま奮ってご投稿いただければと存じます。

【出版委員会】

委員長 静永 健

- 7月30日(土)第1回出版委員会をリモートで開催。『学会報』刊行の進捗状況の確認、「学界展望」の読み合わせ等を行いました。
- 理事会の審議を受け、『学会報』第74集より「中文目次」を新たにつけました。
- 理事会の審議を受け、『学会便り』本年度第2号(本

誌)より本年度の学会賞授与式の記事を新たに掲載しました。

【選挙管理委員会】 委員長 松原 朗

本年度は学会役員改選年に当たっており、評議員選挙(7月2日開票)・理事長選挙(8月6日開票)・監事選挙(10月8日開票)の三つのすべてを、電子投票システム「e投票」を用いて無事に実施することができました。電子投票への移行は、コロナ禍の中で従来の手作業による選挙業務の遂行が困難になることを危惧したことが理由の第一でしたが、同時に、投票率の向上を期待してのことでもありました。結果として、評議員選挙では例年の2倍以上の投票率となり、所期の目標を達成できました。会員数の増加がなかなか望みえない現下の状況の中で、学会の運営に関心を持ち、学会の活動に積極的に参加するコアとなる会員の育成が今後の大事な課題となると思います。選挙の投票率の向上が、その一助となることを期待したいと思います。(なお電子投票の基礎となる会員のメールアドレス登録は現状6割程度です。未登録の会員には、学会ホームページの「メールアドレス登録(会員専用)」より速やかな登録をお願いいたします。パスワードは sinology1234です。)

【将来計画特別委員会】 委員長 弮 和順

一昨年、昨年に続き、本学会ホームページ上で、大会アンケートを実施します。期間は2023年2月末日まで。ホームページ上の右側メニュー「大会関連のお知らせ」を経て、「大会アンケートに関するお願い」に記載の URL から入り、ご回答ください。

内容は、初めてのハイフレックス開催となった第74回大会(早稲田大学)の具体的な実施内容を中心におたずねし、本学会へのご意見なども受け付けます。所要時間は最短で5分程度、ご協力のほど、よろしくごお願い申し上げます。

また、本委員会の活動としては、本学会がかかえる問題、特に会員数減少への対策について、オンライン会議およびメール審議を行いました。それを受けて、10月5日の理事会、同月6日の評議員会において、「会員論著目録(2022年)」の作成に関して、試行案を提出しました。それに関しては、本便りに、大木理事長より、別途依頼文がありますので、ご一読の上、ご協力いただきますよう、お願いいたします。その結果を踏まえつつ、さらに改善を重ねていく予定です。

【研究推進・国際交流委員会】

委員長 三浦 秀一

10月8日・9日の第74回大会において、本学会による「若手支援」を目的とした新たな試みである書評シンポジウムを開催しました。その詳細は本冊子に独立した記事としてまとめましたので本欄での報告を割愛しますが、合計3パネルの関係各位および会場での熱い討論に参加された会員の方々、そして渡邊義浩代表による統率のもと周大な準備を提供していただきました早稲田大学の大会準備会諸氏には、改めてお礼申し上げます。なお、会場配付の一部資料についてネットへのアップロードを失念し、オンライン参加の方々に多大なご迷惑をおかけしましたことにつきましては、深くお詫び申し上げますとともに、今後の反省材料といたします。

さて、書評シンポジウムは、来年度の学会大会(主催校:大阪大学)においても開催する予定です。本年度同様、シンポジウムはパネル単位で公募します。その方法などに関しましては来年度の『学会便り』(2023年第1号)に掲載いたしますが、応募をお考えの会員各位におかれましては、下記3点の条件を、前もってお読みいただければ幸いです。

- ①書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術的専著で、2019～2021年に刊行されたものとする。
- ②評者の年齢は、原則として、書評の対象とする学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下とする。

③専門領域・所属機関・性別などについて多様性を考慮したパネルを歓迎する。あわせて、評者のなかに非会員が含まれることも、1名に限定してではあるがこれを認める。

シンポジウムにおける評者各位の報告は、学会 HP『研究集録』に掲載します。委員会では、当該の年度末までの公開が可能になるよう、①報告原稿の枚数は20枚程度を上限としてそれより短くとも可、②原稿の提出期限はシンポジウム翌年の1月末、③表記や内容等の確認は当委員会内でおこなう、といった要項をまとめました。

以上について、不明な点は当委員会までお問い合わせください。



2022年度 会員動向／新入会員一覧

●会員動向（2022年10月1日現在）

総会員数1,490名、準会員数46機関、賛助会員数14社

●退会会員

○退会申出会員（今年度第1回理事会承認分） 23名

山田 史生	西上 勝	小林 孝
森 秀樹	山辺 進	関口 知実
渡会 顕	森 雅子	大澤 理子
范 建明	高橋 良行	豊島ゆう子
埋田 重夫	虞 萍	三枝 茂人
赤松 紀彦	佐藤 晴彦	三橋佳奈子
呉 雨彤	小川 泰生	景 浩
古賀 俊一	甲斐 勝二	

○退会申出会員（今年度第2回理事会承認分） 5名

堀江 忠道	石塚 英樹	有馬 みち
岩松 久雄	彭 佳紅	

○4年間の会費滞納による退会会員 21名 + 1社

●住所不明会員 20名

井上 雅隆	岩本 優一	大井 浩之
綿本 誠	樽林 雪子	余 祺琪
段 書暁	張 瑶	前園 悠太
宮内 四郎	高橋 治世	末岡 宏
張 齡云	森 宏之	趙 蕊蕊
李 杰玲	陳 駿千	陳 潮涯
鈴木 慎吾	李 麗君	

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

●新入会員一覧

10月6日に開催された2022年度評議員会(オンライン会議)において入会が承認された方々は、以下の通りです。

●通常会員 11名

田 九七	東京大学(院)
王 晴	一橋大学(院)

井上 黎	國學院大学(院)
孔 詩	東京大学(院)
合山林太郎	慶應義塾大学
孫 楊洋	京都大学(院)
三木 啓介	二松學舎大学(院)
永井 もゆ	京都府立大学(院)
蘇 文博	総合研究大学院大学(院)
佟 欣妍	東京大学(院)
郭 立欣	名古屋大学(院)

なお、以下の方々については6月1日付で開催された臨時評議員会(メール審議)において入会が承認され、すでに今年度の会員名簿に掲載されています。

●通常会員 36名

市村俊太郎	馮 超鴻	具 惠珠
小財 陽平	大森 幹太	佐川 英治
柿沼 陽平	渡邊 将智	利根川千枝子
佐藤 大朗	席 暢	Capasso Danilo
俞 昕雯	徐 燕斌	徐 昊
王 瑞	藍 莫雅	王 昊天
楊 靈琳	喬 重寧	高 尚
史 雨	任 天樂	王 若冲
馬 艷艷	黒瀬加那子	吉岡 佑馬
楊 春雨	張 仕琪	間柄 拓也
李 岳陽	胡 華喩	龔 月婷
張 茜	樊 致遠	周 非

訃報

『学会便り』2022年第1号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(敬称略)

後藤 延子(近畿地区)	逝去日不明
小谷 一郎(関東地区)	2021年10月10日
古藤 友子(関東地区)	2022年2月5日
芝木 邦夫(北海道地区)	2022年3月11日
石川 忠久(関東地区)	2022年7月12日
岡 晴夫(中部地区)	2022年9月8日
横山 弘(近畿地区)	2022年10月16日

2023～24年度役員一覧

◆理事長

大木 康

◆副理事長

浅見 洋二 吾妻 重二

◆理事

伊東 貴之 上田 望 木津 祐子 小松 謙 高津 孝
野村 鮎子 三浦 秀一 柳川 順子 弐 和順 渡邊 義浩

◆監事

内山 精也（主席） 牧角 悦子 和田 英信

◆評議員

阿川 修三	浅見 洋二	吾妻 重二	有馬 卓也	飯塚 容
井川 義次	伊東 貴之	上田 望	宇佐美文理	内山 精也
内山 直樹	大木 康	大西 克也	大橋 賢一	岡崎 由美
小川 恒男	小川 利康	垣内 景子	川島 優子	稀代麻也子
木津 祐子	河野貴美子	古勝 隆一	小島 毅	小松 謙
近藤 浩之	齋藤 智寛	齋藤 希史	佐竹 保子	佐藤 大志
佐野 誠子	静永 健	清水賢一郎	末永 高康	鈴木 将久
高津 孝	谷口 洋	田村 容子	陳 捷	土屋 育子
中里見 敬	中島 隆博	二階堂善弘	野村 鮎子	濱田 麻矢
東 英寿	藤井 倫明	星野 幸代	牧角 悦子	町 泉寿郎
松浦 恆雄	松尾 肇子	松原 朗	三浦 秀一	緑川 英樹
柳川 順子	湯浅 邦弘	弐 和順	和田 英信	渡邊 義浩

◆顧問

池田 秀三	池田 知久	今鷹 真	加地 伸行	金 文京
川合 康三	興膳 宏	竹村 則行	土田健次郎	富永 一登
野間 文史	三浦 國雄	村山 吉廣	吉田 公平	

◆幹事

上原 究一 遠藤 星希

日本中国学会 2021年度 (令和3年度) 収支決算書

2021年4月1日～2022年3月31日

(単位：円)

科目	予算	決算	摘要	差額
1. 前年度繰越	¥19,627,458	¥19,627,458		¥0
2. 会員会費	¥9,000,000	¥9,471,000		¥471,000
3. 寄付金	¥800,000	¥3,732,000	新法(加地親善300万)を含む	¥2,932,000
4. 預金利息	¥200	¥133		¥-67
5. 著作権料分配金	¥0	¥0		¥0
総計	¥29,427,658	¥32,830,591	(A) 収入総計	¥3,402,933

科目	予算	決算	摘要	差額
1. 事務局総務費	¥2,060,000	¥1,178,992	(1)～(7)	¥881,008
(1)印刷費	¥650,000	¥329,284	(原)・増刷印刷費を含む、表紙用紙	¥320,716
(2)通信費	¥650,000	¥398,640	(原)・発送費を含む、未収還率	¥251,360
(3)交通費	¥100,000	¥9,396	事務局補佐員交通費等	¥90,604
(4)消耗品費	¥50,000	¥15,743		¥34,257
(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
(6)雑費	¥350,000	¥215,929	振込手数料等	¥134,071
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
2. 事務局人件費	¥1,560,000	¥1,480,000	(1)(2)	¥80,000
(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
(2)謝金	¥1,200,000	¥1,120,000	事務局補佐員謝金を含む	¥80,000
3. 事務局会議費	¥220,000	¥3,754	(1)(2)	¥216,246
(1)会議費	¥120,000	¥682		¥119,318
(2)役員旅費	¥100,000	¥3,072	会計監査交通費	¥96,928
4. 事業費	¥4,830,000	¥4,545,717	(1)(2)	¥284,283
(1)学会報等刊行費	¥3,830,000	¥3,678,313	イ～ニ	¥151,687
イ. 印刷費	¥2,000,000	¥1,889,580	特設印刷(4ヶ月号)・製本料	¥110,420
ロ. 編集費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
ハ. 翻訳謝金	¥330,000	¥240,000	支理新法、中国語訳書印刷費	¥90,000
ニ. 発送費	¥300,000	¥348,733	郵送サービス業務委託等	¥-48,733
(2)学術大会運営費	¥1,000,000	¥867,404	開催枚より132,596円返金	¥132,596

科目	予算	決算	摘要	差額
5. 各種委員会運営費	¥1,240,000	¥327,015	(1)～(7)	¥912,985
(1)大会委員会	¥65,000	¥5,000		¥60,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥0		¥50,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(2)論文審査委員会	¥780,000	¥169,084		¥610,916
イ. 通信費	¥100,000	¥87,683		¥12,317
ロ. 会議・旅費	¥600,000	¥0		¥600,000
ハ. 謝金	¥60,000	¥70,000		¥-10,000
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥11,401		¥8,599
(3)出版委員会	¥230,000	¥21,392		¥208,608
イ. 通信費	¥5,000	¥1,246		¥3,754
ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥0		¥200,000
ハ. 謝金	¥10,000	¥10,000		¥0
ニ. 学会便り編集費	¥10,000	¥10,000		¥0
ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥146		¥4,854
(4)選挙管理委員会	¥20,000	¥5,000	非改選年	¥15,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	¥17,930		¥2,070
イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥12,560	書籍シンポジウム準備費を含む	¥-7,560
(6)広報委員会	¥105,000	¥102,024		¥2,976
イ. 通信費	¥15,000	¥370		¥14,630
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥10,000	¥10,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	¥27,654	チラシ印刷料・サーバー印刷料を含む	¥22,346
ホ. ホームページ管理費	¥25,000	¥64,000		¥-39,000
(7)将来計画特別委員会	¥20,000	¥6,585		¥13,415
イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥1,215		¥3,785
1～5 特別会計積立基金拠出	¥9,910,000	¥7,535,478		¥2,374,522
予備費	¥0	¥0	特別会計(学会基金-学会費)に充当	¥0
予備費	¥19,517,658	¥0	支出費目としては計上しない	¥19,517,658
合計	¥29,427,658	¥7,535,478	(B) 支出合計	¥7,535,478
次年度繰越金	—	¥25,295,113	(A) 収入総計 - (B) 支出合計	¥3,402,933
総計	¥29,427,658	¥32,830,591		¥3,402,933

学会基金

	基本金	
前年度繰越金	¥4,300,000	
特別会計積立金拠出	¥1,157,997	
預金利息	¥0	
預金利息	¥69	
信託収益金	¥0	
合計	¥1,158,066	
日本中国学会費	¥160,000	
次年度繰越金	¥998,066	
合計	¥1,158,066	

備考 (基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

2022年4月23日
日本中国学会監事

内山 精也
牧角 悦子
永富 青地

日本中国学会 2022年度（令和4年度）予算書

2022年4月1日～2023年3月31日

(単位：円)

	科目	予算	摘要
収入の部	1. 前年度繰越	¥25,295,113	
	2. 会費	¥9,000,000	
	3. 寄付金	¥800,000	
	4. 預金利息	¥200	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	総計	¥35,095,313	

	科目	予算	摘要
支出の部	1. 事務局総務費	¥2,260,000	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥650,000	「便り」・封筒等を含む
	(2)通信費	¥650,000	「便り」 発送費を含む
	(3)交通費	¥100,000	
	(4)消耗品費	¥50,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥550,000	振込手数料および対外費を含む
	(7)業務委託料	¥210,000	斯文会
	2. 事務局人件費	¥1,560,000	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥360,000	
	(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐員謝金を含む
	3. 事務局会議費	¥520,000	(1)(2)
	(1)会議費	¥120,000	
	(2)役員旅費	¥400,000	第1回理事会はオンライン開催
	4. 事業費	¥4,880,000	(1)～(2)
	(1)学会報等刊行費	¥3,880,000	イ～ニ
イ. 印刷費	¥2,000,000	学会報及び名簿	
ロ. 編集費	¥1,200,000		
ハ. 翻訳謝金	¥330,000	英文要旨作成・中国語版翻訳補助謝金	
ニ. 発送費	¥350,000	㈱サンセイ業務委託等	
(2)学術大会運営費	¥1,000,000		

	科目	予算	摘要
支出の部	5. 各種委員会運営費	¥1,340,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥65,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥780,000	
	イ. 通信費	¥100,000	
	ロ. 会議・旅費	¥600,000	
	ハ. 謝金	¥60,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥230,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	
	ハ. 謝金	¥10,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥10,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選挙管理委員会	¥120,000	改選年
	イ. 通信費	¥15,000	
	ロ. 会議・旅費	¥60,000	
ハ. 謝金	¥40,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
(6)広報委員会	¥105,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥10,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	ホームページ維持費を含む	
ホ. ホームページ管理費	¥35,000		
(7)将来計画特別委員会	¥20,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
1～5	¥10,560,000		
特別寄付金会計拠出	¥3,000,000	新設の特別寄付金会計に充当	
予備費	¥21,535,313		
合計	¥35,095,313		

学会基金

	基本金	予算
収入の部	前年度繰越金	¥998,066
	預金利息	¥100
	信託収益金	¥0
	合計	¥998,166
支出の部	日本中国学会賞（基金分）	¥80,000
	次年度繰越金	¥918,166
合計		¥998,166

特別寄付金会計

収入の部	特別寄付金会計拠出	¥3,000,000
	前年度繰越金	¥0
	特別寄付金	¥0
	預金利息	¥10
合計		¥3,000,010
支出の部	日本中国学会賞（上乗せ分）	¥40,000
	大会発表者宿泊費補助金	¥200,000
	次年度繰越金	¥2,760,010
	合計	

備考（基本金内訳）

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

事務局からのお知らせ

彙報

2022年度第1回理事会（5月29日開催、オンライン会議）での決定事項について、6月1日付で臨時評議員会（メール審議）を開催した。報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・2022年度日本中国学会賞受賞者の決定について
[文学・語学部門]
陸 穎瑤 会員
『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』所収「曉賦」佚句考
——東アジアに流伝した晩唐律賦——

【審議事項】

- ・新入会者の決定について
- ・2022年度定例評議員会及び次期評議員会の開催方法について
- ・日本中国学会「特別寄付金会計」創設について
- ・顧問嘱任の件について

10月6日に開催した2022年度評議員会・次期（2023-24年度）評議員会（オンライン会議）における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・理事長報告
- ・2023-24年度評議員選挙の結果について
- ・2023-24年度理事長選挙の結果について
- ・各種委員会報告
- ・論文執筆要領一部改訂について
- ・『日本中国学会報』第74集及び会員名簿の発行について
- ・学会報編集担当・大会開催校等について（2023年度）
学会報編集担当
洲脇 武志 会員（愛知県立大学）
学界展望執筆担当
哲学／吾妻 重二 会員（関西大学）

文学／小川 恒男 会員（広島大学）

語学／秋谷 裕幸 会員（日本中国語学会・愛媛大学）

学会便り編集担当（2022年第2号・2023年第1号）

宇佐美文理 会員（京都大学）

大会開催校 大阪大学

- ・会員動向について
- ・2023-24年度副理事長・理事の委嘱について
- ・その他

【審議事項】

- ・2021年度決算・監査報告
- ・2022年度予算案
- ・新入会員の承認
- ・2022年度総会次第について
- ・2023-24年度監事の選出
- ・その他

10月8日の2022年度総会において、評議員会での議決事項を報告した。

◎顧問の委嘱について

2022年度第1回理事会（5月29日開催）、臨時評議員会（6月1日付、メール審議）の議を経て、次の一会員に顧問を委嘱することとなった。

金 文京 会員

◎入会申し込み方法と締切の一部変更について

入会申し込みの方法と締切が一部変更となりました。今後の入会申し込みは、「入会申込書」を学会ホームページからダウンロード、プリントアウトして記入捺印の上、学会事務局（〒113-0034 文京区湯島1-4-25 斯文会館内）まで郵送すると同時に、その画像の電子ファイル（写真撮影したもので可）をEメール（データ添付）により、学会事務局のメールアドレス（info@nippon-

chugoku-gakkai.org)にご送付ください。5月分の申し込みは5月15日までに、10月分は10月1日までに電子ファイルをご送付願います(締切厳守)。

◎特別寄付金会計の創設について

2021年度に加地伸行会員より300万円のご寄付をいただきました。これを契機として、日本中国学会に既存の一般会計および学会基金とは別に、若手会員の支援を主たる目的とする特別寄付金会計を新たに設けることといたしました。この特別寄付金会計は、当面以下の2つの使途に支出いたします。

(1) 日本中国学会賞賞金の増額分

日本中国学会賞受賞者1名につき、学会基金から拠出される8万円に加えて、特別寄付金会計からも4万円の賞金を支給する。なお、受賞者が若手会員の定義に該当しない場合でも、増額分は支給するものとする。

(2) 若手会員の大会参加宿泊費補助

大会で発表(通常の発表のほか、次世代シンポジウム・書評シンポジウム等のシンポジウム企画での登壇を含む)する若手会員のうち、遠方に在住し、宿泊を必要とする者が、宿泊費を私費により支出する場合に、特別寄付金会計より一律1万円の補助金を支給する。

いずれも本年度よりさっそく支出することとし、先日開催されました第74回大会(於早稲田大学)において、(1)は受賞者1名、(2)は条件をみたした発表者10名に、それぞれ規定の額を支給いたしました。

なお、若手会員は、「すべての学生会員」および「大学・大学院・高等専門学校の教授(特任を含む)・准教授(同前)・専任講師・助教(特任を含む)・名誉教授、及び高等学校等の正規教員・専任教諭のいずれにも該当しない普通会员」と定義しております。

今後は「個人または団体より一時に20万円以上のご寄付をいただいた場合」、および「個人または団体より、特別寄付金会計に対する寄付であるとの意思確認を経た上で、一時に20万円未満のご寄付をいただいた場合」に、

この特別寄付金会計に組み入れ、上記の使途に充てさせていただきます。なお、20万円以上のご寄付については、匿名希望のお申し出がない限り、寄付者のご芳名と金額を『日本中国学会便り』に毎号永続的に記載させていただきます。20万円未満の場合は、同じくご芳名と金額を『日本中国学会便り』に一度限りで記載いたします。会員諸氏のご寄付をお待ちしております。寄付のご意向をお持ちの方は、まずは事務局にご一報ください。

◎特別寄付金会計寄付者(20万円以上、歴代)

2021年度:加地伸行会員(300万円)

◎会費の納付について

会費未納の方は、まずは事務局までお問い合わせ下さい。2ヶ年(2021・2022年度)未納の方には、今年度の学会報を送付していません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

◎住所・所属機関等の変更について

住所や所属機関等に変更がありましたら、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。郵便、あるいはファックスでも受け付けてはおりますが、なるべく電子メールをご利用くださいますようお願いいたします。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を行っております。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

◎メールアドレス登録のお願い

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。まだご登録いただいていない方はホームページの「メールアドレス登録(会員専用)」よりご登録をお願いいたします。パスワードはsinology1234です。

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

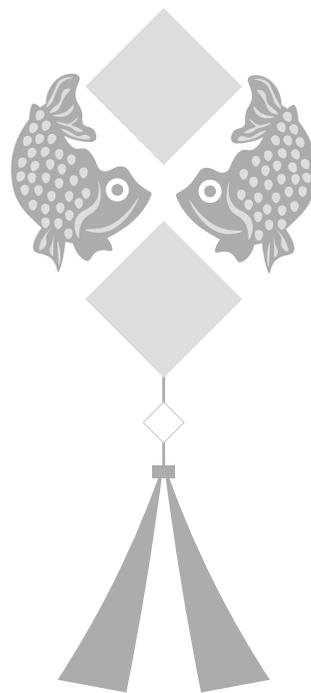
斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会



「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に掲載することになっています。

2022年1月から同年12月末までに開催された国内学会の原稿は、来年（2023）2月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。

従来ご報告が無かった学会（研究会）のご報告も歓迎いたします。

なお、紙面の都合上、お送りいただいた原稿を編集局で一部加工することがあります。また、校正はありませんので、あらかじめご承知おきください。

コロナ禍のもと、Zoom や Teams、あるいは YouTube 動画配信などさまざまな開催形態で行われたと思いますが、本紙ではそれらを一括して「オンライン開催」と表示させていただきます。

原稿送付先：

gakkaidayorikyoto@gmail.com（京都大学・宇佐美あて）

「会員論著目録（2022年）」作成への協力をお願い

会員各位

日本中国学会理事長 大木 康

すでに日本中国学会ホームページにおいてご案内のとおり、本学会では、デジタル化推進の一環として、下記のとおり、「会員論著目録（2022年）」の作成を試行することになりました。会員の皆様に、Google フォームのアンケートに回答入力する方法でデータをご提供いただき、作成した目録は、学会ホームページでの公開を予定しております。

つきましては、入力に必要なパスワードをお知らせしますので、是非とも、アクセスの上、入力にご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

記

【対象】 2022年1月～12月に発表された論文・著書等

【入力力】 原則、会員自身が入力する。ただし、入力が困難な場合は、書面による提出を学会事務局で受け付ける。

【入力期間】 2022年12月～2023年3月末

【パスワード】 roncho2022

【分類・区分】 従来の形式を踏襲し、「哲学」「文学」「語学」の3つに大別した上で、時代・分野等に細分する。また、複数の区分にまたがる内容の論著については、一箇所への入力に限定するのではなく、必要に応じて複数回、関連する区分に回答入力できることとする。

なお、今後の計画として、今回の試行結果を踏まえて改善を図るとともに、2016年以降中断されている「論著目録」の補充等についても検討します。

また、今回の試行は、将来計画特別委員会が作成を担当しますが、次年度以降は、改めて実施体制を検討します。

※不明の点がありましたら、学会事務局にお問合せください。

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のよう
に定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、
毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントによって
印字し、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わない
ものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論
文刊行の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調
整を求められることがある。なお、手書き原稿提出の場合
は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用
された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を
学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、『學會報』の組版における
占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分
が、ほぼ25行（1行30字）である。図版原稿は原則とし
てそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希
望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものにつ
いては、横書きも可とする。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいづ
れかをを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文
または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は
該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一
読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略
することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれ
に準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められる
ものについては、原文のみ引用することを妨げない。原
文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認め
ない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓
点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加
算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とす
るが、刊行にあたっては全文を原則として旧漢字体（印
刷標準字体）に統一する。ただし、本人の申し出によ
って、常用漢字体での印刷を認める。刊行にあたっては、
本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8
ポイントの活字を使用する。特に本文括弧内を9ポイン
トにする場合および内容上特に異体字であることが必
要な場合は、当該箇所にて明記する。特に必要とするも
のについては、簡体字等での引用も可とする。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全
文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記に

ついては、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。

10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語拼音
方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、
特殊な綴りに通用している固有名詞（例：孫逸仙 Sun
Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りにつ
いてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、
ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添
付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者
は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を
添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、
毎年1月15日までの消印のあるものを有効とする。持
参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内 日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想・文学・
語学、日本漢学、歴史）の別を原稿第1ページに朱書
する。ただし、論文の内容により、複数部門にわた
る審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出す
る。原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住
所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最
終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出す
る。（書式は自由。）

校正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正
は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ
認める。

抜刷

18. 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

その他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に
複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研
究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲
渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認め
られる範囲の改変を行うことがある。

(昭和62年10月11日制定)	(平成13年5月13日修正)
(平成14年10月13日一部修正)	(平成15年10月5日一部修正)
(平成19年10月7日一部修正)	(平成20年5月17日一部修正)
(平成21年10月11日一部修正)	(平成22年6月6日一部修正)
(平成22年10月10日一部修正)	(平成23年10月9日一部修正)
(平成24年10月7日一部修正)	(平成25年3月31日一部修正)
(平成25年10月13日一部修正)	(平成27年10月10日一部修正)
(平成29年6月12日一部修正)	(平成30年6月3日一部修正)
(令和4年10月5日一部修正)	